

英語教育とコンピュータの利用

菅生 隆

はじめに

昨年、IT基本法が成立したことにより、日本でも本格的な情報化社会の幕開けとなった。情報関連の分野では、アメリカのみならずアジアのいくつかの国々にも遅れをとっていた日本だが、これで巻き返しの準備が整ったと言える。

一方、教育の世界に目を向けてみると、新学習指導要領においては、「視聴覚教材や、LL、コンピュータ、情報通信ネットワーク」などを指導に生かすことが求められている。これらを有効活用する指導は、まさにバラ色の夢に満ちた英語教育を予感させ、新世紀にふさわしいものに思えるが、はたしてそうであろうか。本稿では、英語教育におけるコンピュータの利用法的一端およびその心得などについて述べ、これからコンピュータを利用しようとする先生がたの参考に供したいと思う。

だれがなんのために利用するのか

LLが教育現場に登場した際と同じように、コンピュータの場合も、積極的に活用する人たちと、どのようなことがあっても触れようとせず我が道を突き進む人たちがいる。基本的には、どのような態度や立場をとってもかまわないが、私たちとしては、授業の準備や授業展開の効率化を図る、という視点を持つことが大切だ。

利用にあたっては、手段と目的を取り違えてはいけない。たとえば、ALTが常駐しているのにもかかわらず、コンピュータを活用してコミュニケーション活動を行う研究授業が時折見受けられる。しかし、この場合コンピュータを通して英会話の練習をするよりALTと話をしたほうがずっと効率がよい。本末転倒してしまってはならない。英語の授業は、コンピュータを使うためではなくて、英語能力を向上させるための授業であることを忘れないでほしい。

インターネットの利用

やはり情報の宝庫である。このところインターネットは急速な勢いで、学校現場に普及しておりコンピュータ室のみならず、職員室、準備室、各教室からの接続も可能となっているところが増えてきている。あと数年ですべての学校に接続されるようになるであろう。筆者は6年ほど前から個人レベルでインターネットを利用しているが、学校や社会への普及速度には目をみはるものがある。今後は、情報を選択する「眼」を養うことが大切だろう。そうでなかったら、情報の洪水に飲み込まれてしまう。どの情報が有益か、コンピュータは教えてはくれない。

インターネットでは、教室の壁を乗り越え、遠く海を隔てた外国の人々とさまざまな形態でコミュニケーションができるところがすばらしい。比較的簡単に実践できるE-mailによる交流は、相手のつごうを気にせずに送受信できるのでとても便利である。特に、外国との送受信の際に威力を発揮する。近年、姉妹校提携を結んだり交換留学制度を設ける学校が増加しているが、その際の連絡手段としての利用価値が高い。

次に示すのは、筆者の前任校とかつて姉妹校であった学校の校長先生からのメールである。

(E-mailの例)

Hello, and happy y2k!

It was good to hear from you! The y2k bug did not bite here. All appears to be going well. It was good to hear from you. I had been sending e-mail messages to <Chosho@xxxx.ne.jp> but this was apparently not the correct address. Please accept my apology. I have changed the address in my address book, and plan to e-mail you often.

Have a very happy and healthy 2000!

このような、メールの送受信を継続することは、教師の英語力の向上にもつながるだろう。上記の例では米国でもy2k問題は、あまりトラブルにはならなかったことがわかる。数日のうちに米国の個人レベルでのy2k問題のようすをうかがい知ることになった。

インターネットを利用した授業は、(1)情報収集型 (2)受信型 (3)発信型 (4)双方向型 に分類が可能であるが、自分の英語授業ではどれを中心に据えるか一考すべきである。インターネットには情報があふれているが、教材として利用するためには、教室利用にふさわしいものに加工が必要な場合もある。この点では教師の配慮とくふうが求められる。

普通の授業とコンピュータ

私たち英語教師の多くは、主に普通教室で英語を教えているというのが一般的であろう。コンピュータ室ならではの華やかな実践にばかり目が向きがちではあるが、日常の授業をおろそかにしてはいけない。

最近では、コンピュータの華やかな利用法に加えて、教室ですぐに使えるアイデアや技術ばかりがもてはやされる傾向にあるが、もう少し冷静になって自分たちの足元を見つめることも必要だろう。英語教育界に不易と流行があるとすれば、不易のほうに今少し目を向けてもらいたいと考えている。そのうえで、自分の授業のどの部分にコンピュータの利用が可能であり、どの部分は不可能なのかを明確にする必要がある。

コンピュータ利用の活動を導入するにあたって

導入にあたっては、目標を設定すべきであるが、次の質問に自問自答してみると問題点が明確になる。

- ・なぜ、コンピュータ等を導入した活動を実施することを望んだか。
- ・どのくらいの時間や期間を費やしたいのか。
- ・活動は生徒のニーズを反映しているか。
- ・生徒のコミュニケーションの相手としてだれを想定しているか。クラス内の生徒か。他校の生徒か。

あるいは他国の生徒か。

・四技能のうち最も焦点を当てたいのは何か。
(利用法の例)

- ・E-mail ・チャット ・成績処理 ・情報の蓄積
- ・DVD-ROM等 ・iモードとパソコンの連携利用
- ・オリジナルCD (またはMD) の作成 (英語の歌)
- ・音声入力, スキャナー, グラマーチェッカー, スpellチェッカー ・画像の送受信
- ・上記のほか, コンピュータ室で利用可能な機能

上記のハードや機能は、何らかの形で授業での実践が可能なものである。これらを取捨選択したりさまざまに組み合わせたりしてくふうすれば、オリジナルな利用が可能である。要は、自分ができることとできないことを見極めたうえでの利用を勧めたい。まちがっても機械に使われることのないようにしたいものである。携帯電話に振り回されてしまっている最近の生徒の姿を見るにつけ、この感を強くしている。

おわりに

私たち英語の教師は、パソコンのインストラクターでもSE(システムエンジニア)でもない。英語教師の教えるべき本質とは何かを見極め、信念を持って授業に臨みたい。コンピュータに振り回されて、自ら針のむしろに座ることだけは避けなければならない。そうでなかったらなんのためのコンピュータかわからなくなってしまう。どんなに技術が進歩しようとも教育の本質は、「教師と生徒の人間関係にある」ということを忘れずにいたいと思う。技術論に堕してしまうことだけは避けたいと思う今日このごろである。

最後に、今後の授業を考えるうえで、次の質問に答えてみてほしいと思う。これは、コンピュータを使ってみたあなたの授業への参観者からのコメントである。

「別にコンピュータやインターネットを使わなくてもこの授業はできるんじゃないですか。」

(銚子市立銚子高等学校教諭)